

茨城県教育財団文化財調査報告第194集

谷 畑 遺 跡

平成 14 年 3 月

財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財團文化財調査報告第194集

谷 畑 遺 跡

平成14年3月

財團法人 茨城県教育財團

序

このたび、防衛庁東京防衛施設局は、土浦市小岩田地区において自衛隊共同宿舎の建設を計画し、その対象地内に谷畠遺跡が所在しております。

財団法人茨城県教育財團は、防衛庁東京防衛施設局と埋蔵文化財発掘調査事業について委託契約を結び、平成13年2月に谷畠遺跡の発掘調査を実施いたしましたところ、貴重な遺構、遺物を検出することができました。

本書は、谷畠遺跡の調査結果を収録したものであります。本書が、学術的な研究資料としてはもとより、教育・文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である防衛庁東京防衛施設局から多大なる御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、土浦市教育委員会、土浦市立上高津貝塚ふるさと歴史の広場をはじめ、関係各機関及び関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝の意を表します。

平成14年3月

財団法人 茨城県教育財團
理事長 齋藤 佳郎

例　　言

- 1 本書は、防衛庁東京防衛施設局の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成12年度に発掘調査を実施した、茨城県土浦市小岩田西1丁目1063-20ほかに所在する谷畠遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。
　調　　査 平成13年2月1日～平成13年2月28日^{火曜日付}
　整　　理 平成13年5月1日～平成13年5月31日
- 3 当遺跡の発掘調査は、調査第一課長阿久津久の指揮のもと、調査第一課第1班長海老澤稔、主任調査員成島一也、主任調査員川上直登が担当した。
- 4 当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理第一課長川井正一の指揮のもと、主任調査員川上直登が担当した。
- 5 発掘調査及び整理に際し、御指導・御協力を賜った関係機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標を原点とし、X軸=+6,160m、Y軸=+32,680mの交点を基準点(A 1 a1)とした。

調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北各々10等分し、4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A 1 区」、「B 2 区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3、…とし、名称は大調査区の名称を冠し、「A 1 a1区」、「B 2 b2区」のように呼称した。

2 遺跡・遺物・土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 住居跡—S I 土坑—S K 溝—S D 不明遺構—S X

遺物 土器—P 土製品—D P 石器・石製品—Q 金属製品—M 拓本記録土器—T P

3 遺構及び遺物の実測図中の表示は次のとおりである。



4 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

5 遺構・遺物実測図の作成方法については次のとおりである。

(1) 遺構全体図は200分の1、遺構は60分の1に縮尺して掲載することを基本とした。

(2) 遺物は原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについて個々に縮尺をスケールで表示した。

6 「主軸」は、長軸(径)を主軸とみなした。「主軸・長径方向」は主軸・長径が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。(例 N - 10° - E)

7 遺物観察表の記載方法は次のとおりである。

(1) 土器の計測値の単位はcmである。なお、現存値は()で、推定値は〔 〕を付して示した。

(2) 備考の欄は、土器の現存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号については、土器、拓本のみ掲載の土器片、土製品、石製品、金属製品ごとに通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号は同一とした。

8 遺構一覧表における計測値で、現存値は()、推定値は〔 〕を付けて示した。

抄 錄

ふりがな	やばたいせき							
書名	谷畑遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第194集							
著者名	川上直登							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2002(平成14)年3月25日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村番号	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
谷畑遺跡	いばらきけんつちうちらし 茨城県土浦市 こいわたじ	08203 小岩田西1丁 目1063-20 か	36度 1 468	140度 25分 00秒	24m 22分 30秒	20010201 ~ 20010228	430.0m ²	霞ヶ浦(7)特別借受宿舎建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
谷畑遺跡	集落跡	古 墳	堅穴住居跡 1軒		土師器		古墳時代から奈良・平安時代を中心とする集落跡と考えられる。 遺物としては、住居跡や土坑から須恵器壊の完形品が出土している。	
		奈良・平安	堅穴住居跡 2軒 土坑 1基		土師器、須恵器 土師器、須恵器			
	その他	縄 文			縄文土器片 弥生土器片 土師質土器 鉄製品、土製品			
		弥 生 中 世 不 明	土坑 溝跡 不明遺構	9基 3条 1基				

目 次

序

例 言

凡 例

抄 錄

目 次

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	8
1 古墳時代の遺構と遺物	8
(1) 壺穴住居跡	8
2 奈良・平安時代の遺構と遺物	10
(1) 壺穴住居跡	10
(2) 土坑	14
3 時期不明の遺構と遺物	15
(1) 土坑	15
(2) 潟	17
(3) 不明遺構	19
4 遺構外出土遺物	20
第4節 まとめ	22

写真図版

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

東京防衛施設局は、土浦市小岩田西地区において自衛隊共同宿舎新設工事事業を進めている。

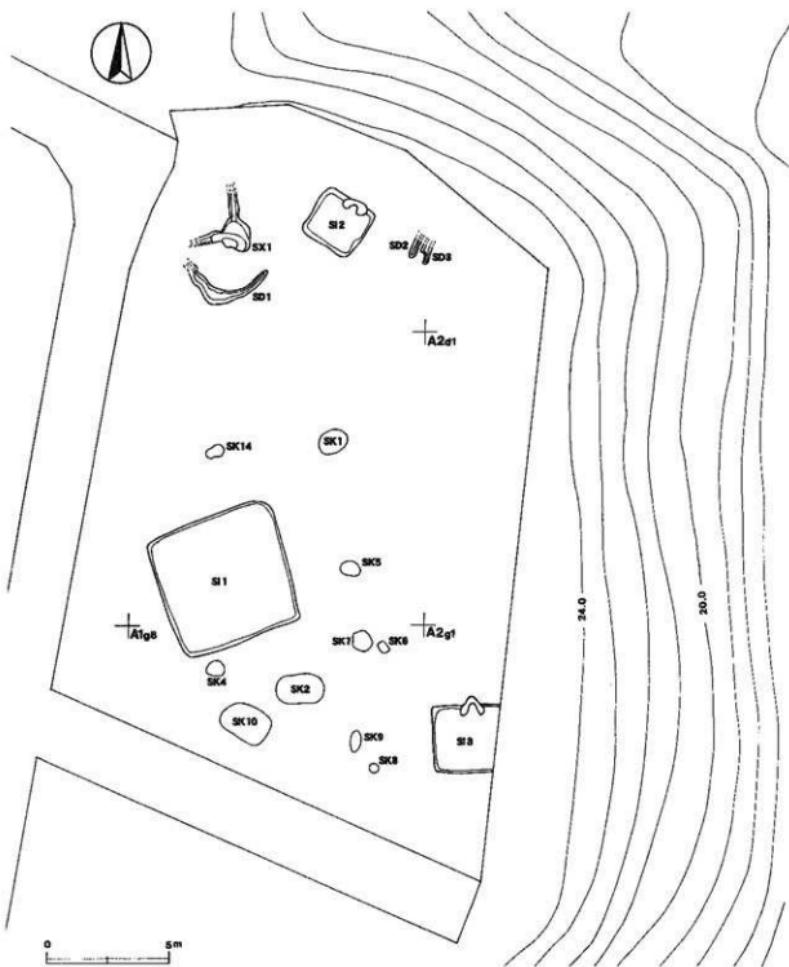
平成12年9月11日、東京防衛施設局長から、土浦市教育委員会教育長あてに、自衛隊共同宿舎工事地内における埋蔵文化財の所在の有無とその取り扱いについて紹介があった。同年9月19日、土浦市教育委員会教育長から茨城県教育委員会教育長あてに、照会文が進達された。それを受けて、茨城県教育委員会は、同年9月21日に事業地内の現地踏査を、同年9月27日には試掘調査を実施した。同年10月6日、茨城県教育委員会教育長から東京防衛施設局長あてに、事業地内に谷畑遺跡が所在する旨回答した。同年10月20日、東京防衛施設局長から、茨城県教育委員会教育長あてに、谷畑遺跡について、文化財保護法第57条の3に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の通知が提出された。同年11月7日、茨城県教育委員会教育長から、東京防衛施設局長あてに、谷畑遺跡については、記録保存のための発掘調査を実施するよう勧告した。同年11月21日、東京防衛施設局長から茨城県教育委員会教育長あてに、自衛隊共同宿舎新設工事地内における埋蔵文化財(谷畑遺跡)の発掘調査の実施について協議書が提出された。同年12月6日、茨城県教育委員会教育長は、東京防衛施設局長あてに、谷畑遺跡の発掘調査については、財団法人茨城県教育財団が調査機関となることを回答した。

東京防衛施設局と茨城県教育財団は、埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び、平成13年2月1日から同年2月28日にかけて、谷畑遺跡の発掘調査を実施することになった。

第2節 調査経過

谷畑遺跡の発掘調査は、平成13年2月1日から平成13年2月28までの1か月間実施した。以下、調査の経過について、その概要を表で記載する。

項目	第1週	第2週	第3週	第4週	第5週
表土除去 及 び 遺構確認					
遺構調査					
洗浄及び 注記作業					
補足調査 及 び 後片付け					



第1図 谷畑遺跡遺構全体図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

谷畑遺跡は、土浦市小岩田西1丁目1063-20ほかに所在している。

遺跡のある土浦市は、新治台地及び筑波稻敷台地と呼ばれる洪積台地と、両台地の間に西から東に流れる桜川の沖積低地や霞ヶ浦沿岸の低湿地からなっている。新治台地は市の北部に位置し、筑波山塊から南東に延びる標高24~27mの台地で、桜川、恋瀬川、及び霞ヶ浦に囲まれている。筑波稻敷台地は市の南部に位置し、真正盤台地から南東に延びる標高24m前後の台地で、桜川、小貝川及び霞ヶ浦に囲まれている。新治台地及び筑波稻敷台地の地層は、新生代第四紀更新世に形成された層が基盤となり、下部から上部にかけて竜ヶ崎砂礫層、常磐粘土層、関東ローム層、表土層の順で堆積している。

当遺跡は、土浦市の南東部に位置し、霞ヶ浦に注ぐ花室川北岸の台地とその小支谷に挟まれた細長い尾根上、標高24mほどに立地している。遺跡周辺の土地利用状況は、主として宅地・畠地・山林であり、花室川流域にひろがる沖積低地は、水田として利用されており、台地と水田との比高は約19mである。遺跡の現況は、宅地である。

第2節 歴史的環境

谷畑遺跡の所在する筑波稻敷台地には、桜川に面する台地縁辺部や花室川流域に数多くの遺跡が存在している(第1図)。ここでは、花室川流域の遺跡について述べることにする。

旧石器時代の遺跡は、^{水国}遺跡(45)、^{池ノ台}遺跡(43)などがあり、水国遺跡、池ノ台遺跡からは、ナイフ形石器が出土している。

縄文時代になると前期から中期にかけて遺跡の数は増加し、後期から晩期にかけて減少する状況が認められる。早期の遺跡は、木の宮南遺跡(17)、ビヤ首遺跡(44)、水国遺跡などがあり、水国遺跡からは茅山期の竪穴住居跡が調査されている。前期の遺跡は、鳥山遺跡、稚原前遺跡(19)、右切貝塚東遺跡(21)などがあり、鳥山遺跡で関山期の竪穴住居跡、右切貝塚東遺跡では黒浜期の竪穴住居跡が調査されている。中期の遺跡は、平成6年度に調査された宮前遺跡(20)がある。宮前遺跡からは、この時代の竪穴住居跡36軒が確認されている。後・晩期の遺跡は、峰崎遺跡(18)、木の宮南遺跡などがある。

弥生時代の遺跡は、鳥山遺跡、水国遺跡などがあり、鳥山遺跡及び水国遺跡は、発掘調査によって後期の集落が存在していたことが確認されている。

古墳時代の遺跡については、これまで行われた発掘調査によって、集落の様相が明らかにされている。鳥山遺跡および永国遺跡は、前期から後期にわたって形成された集落跡である。鳥山遺跡では、王作工房跡が7軒確認されており、第57号工房跡から瑪瑙製の勾玉や碧玉材で作られた管玉の未品が数多く出土している。笠原丘遺跡(26)および南丘遺跡(55)は、前期と後期の集落跡である。寺家ノ後A遺跡(52)および寺家ノ後B遺跡(53)は、中期から後期にわたる集落跡で、その後、終末期の古墳群が形成されている。念代遺跡(25)、長峰遺跡(56)、十三塚B遺跡(54)および池ノ台遺跡は、後期になってから新しく営まれた遺跡である。このような古墳時代の遺跡の分布をみてみると、前期から中期にかけて急激な変化は認められないが、後期に



第2図 谷畑遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院2万5千分の1「土浦」）

表1 谷畠遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代					番号	遺跡名	時代				
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平世
①	谷畠遺跡			○	○		29	永峰遺跡		○	○		
2	小松貝塚	○					30	堂地塚遺跡	○	○	○		
3	摩利山貝塚	○					31	小西遺跡	○			○	
4	中高津古墳			○			32	堂後遺跡	○		○	○	
5	高津天神古墳群			○			33	霞ヶ岡遺跡	○		○	○	
6	小松古墳			○			34	霞ヶ岡北遺跡	○		○	○	
7	三芳古墳			○			35	東谷遺跡				○	
8	中内山古墳群			○			36	霞ヶ岡古墳				○	
9	石倉山古墳群			○			37	内出後遺跡	○	○	○	○	
10	ともえ塚古墳群			○			38	油麦田遺跡				○	○
11	鳥山遺跡	○	○	○	○		39	河ら地遺跡				○	○
12	大岩田貝塚	○					40	桜ヶ丘遺跡				○	
13	谷原門遺跡	○		○	○		41	桜ヶ丘古墳				○	
14	南達中遺跡			○	○		42	小松遺跡				○	○
15	馬道遺跡		○	○	○		43	池ノ台遺跡	○	○		○	
16	木の宮北遺跡	○					44	ピア首遺跡					
17	木の宮南遺跡	○	○		○		45	永国遺跡	○	○	○	○	
18	峰崎遺跡	○			○		46	宮久保遺跡	○			○	
19	権現前遺跡	○			○		47	龜井遺跡				○	○
20	宮前遺跡	○	○		○		48	西原遺跡				○	○
21	右朝貝塚東遺跡	○					49	弁天社遺跡				○	○
22	宮塚遺跡	○					50	下高津小学校遺跡				○	○
23	内路地台遺跡				○		51	神出遺跡	○			○	○
24	右朝十三塚				○		52	寺家ノ後A遺跡	○			○	
25	念代遺跡			○	○		53	寺家ノ後B遺跡				○	
26	平坪遺跡			○	○		54	十三塚B遺跡				○	
27	数光遺跡	○			○		55	南丘遺跡				○	○
28	右朝館跡				○		56	長峰遺跡	○			○	○

至ると爆発的な遺跡数の増加が認められる。

時代が進んで律令制下の奈良・平安時代になると、土浦市域は筑波郡・信太郡・茨城郡・河内郡の四郡にまたがり、谷畠遺跡周辺は信太郡中家郷に属していたと考えられる。この時代の遺跡は、今回報告する谷畠遺跡の他に、刻書のある紡錘車、墨書き土器、金銅製の帶金具(巡方)が出土している鳥山遺跡¹³、墨書き土器や銅製帶金具(鈎帶)が出土している念代遺跡¹⁴、墨書き土器が出土している数光遺跡¹⁵(27)、灰釉陶器が出土してい神出¹⁶

遺跡¹⁰〈51〉、長峰遺跡¹¹、灰釉陶器や銅製帶金具(巡方)が出土している内出後遺跡¹²〈37〉などがある。

中世以降の遺跡は、神出遺跡、右朝十三塚¹³〈24〉、右朝館跡¹⁴〈28〉、宮塚遺跡¹⁵〈22〉などがある。右朝館¹⁶跡からは、土器や壺跡などが確認され、陶器片や磁器片、土師質の皿が出土している。また、宮塚遺跡からは、地下式壠が3基確認され、内耳土器、壺鉢、陶磁器および香炉などが出土している。

註

- 1) 日本産業史研究所 「茨城県土浦市 水国遺跡」〔日本産業史研究所報告〕15 1983年9月
- 2) 土浦市教育委員会 「池ノ台遺跡調査報告」 1981年1月
- 3) 註1)と同じ。
- 4) 茨城県住宅供給公社 「土浦市烏山遺跡群—土浦市烏山団地造成用地内埋蔵文化財2・3次調査報告書」 1975年3月
土浦市教育委員会 「茨城県土浦市 烏山遺跡」 1988年3月
- 5) 茨城県教育財団「主要地方道土浦竜ヶ崎線道路改良工事地内埋蔵文化財報告書 右朝貝塚東遺跡 内路地台遺跡 念代遺跡 平坪遺跡」 〔茨城県教育財団文化財調査報告〕第111集 1996年3月
- 6) 茨城県教育財団「都市計画道荒川沖木田余線街路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 宮前遺跡」 〔茨城県教育財団文化財調査報告〕第118集 1997年3月
- 7) 註4)と同じ。
- 8) 茨城県教育財団「水国地区住宅団地建設予定地内埋蔵文化財調査報告書 寺家ノ後A遺跡 寺家ノ後B遺跡 十三塚A遺跡 十三塚B遺跡 永国十三塚遺跡 旧鎌倉街道」〔茨城県教育財団文化財調査報告〕第60集 1990年3月
- 9) 註8)と同じ。
- 10) 註8)と同じ。
- 11) 註4)と同じ。
- 12) 註5)と同じ。
- 13) 茨城県教育財団「一般国道125号道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 西郷遺跡 南丘遺跡 長峰遺跡 数光遺跡 宮塚遺跡 右朝館跡 内路地台遺跡」 〔茨城県教育財団文化財調査報告〕第64集 1991年3月
- 14) 土浦市教育委員会 土浦市遺跡調査会 「東出・神出・中井遺跡」 1999年10月
- 15) 註13)と同じ。
- 16) 土浦市教育委員会 「古代霞ヶ浦事情—常陸国府とその周辺—」 2000年10月
- 17) 註13)と同じ。
- 18) 註13)と同じ。

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

当遺跡は、今回の調査によって、古墳時代、奈良・平安時代の集落跡を中心とする複合遺跡であることが判明した。遺構としては、古墳時代の堅穴住居跡1軒、奈良・平安時代の堅穴住居跡2軒、土坑1基、時期不明の土坑9基、溝3条、不明遺構1基が検出された。

遺物は、遺物収納箱(60×40×20cm)に5箱出土している。遺物の大部分は、古墳時代から奈良・平安時代にかけての土師器(壺・高壺・高台付壺・甕)、須恵器(壺・鉢・瓶・甕)である。他には、縄文土器片、弥生上器片、球状土錘、上部質土器小皿)、鉄製品、砥石などが出土している。

第2節 基 本 層 序

調査区西部のA-1-d8区に於けるトピットを設定し、約2.5m掘り下げて、基本土層の観察を行った(第3図)。

なお、日一ム層の層序区分については、武藏野台地での層序区分を参考に、ローマ数字で示すこととする。

I層は暗褐色の表土層で、ローム中ブロック・ローム小ブロックを多量、ローム粒子を中量、ローム大ブロックを少量食んでいる。粘性と縮まりはともに普通で、層厚は10~15cmである。

IIa・b層は暗褐色の腐食土層で、表土とローム層の間層と考えられる。

IIa層は、ローム小ブロック多量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含んでいる。粘性と縮まりはともに普通で、層厚は10~20cmである。

且ト層は、ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を中量含んでる。層厚は17~25cmである。

III・IV層は脛位が安定せず、確認することができなかった。

V層の第一黒色帯(BB I)は端位が安定せず、確認できなかった。

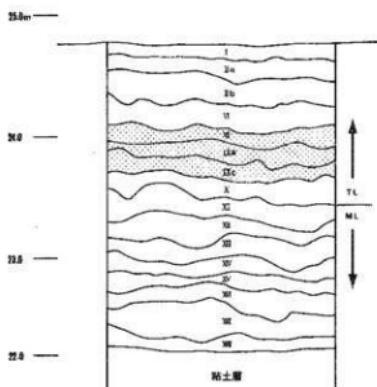
VI層は褐色のハードローム層で、炭化粒子を少量含んでいる。層厚は13~27cmである。AT層は確認できなかった。

種層は暗褐色ローム層で、黒色粒子を少量含んでいる。第二黒色帯(BB II)の最上層と考えられ、層厚は10~20cmである。

IXa層は暗褐色ローム層で、第二黒色帶(BB II)の間隔と考えられる。層厚は5~15cmである。

IXb層は層位が定めせず、確認できなかった。

IXc層は暗褐色ローム層で、黒色粒子・赤色粒子を少量含んでいる。VII層よりやや色調が明るいことから、第二黒色帯の最下位層と考えられる。層厚は10~20cmである。



第3図 基本上層図

X層は褐色ローム層で、白色粒子・赤色粒子を微量含み、硬く結まっている。層厚は10~25cmである。ここまでが立川ローム層(T L)に比定されると考えられる。

XI層はにぶい褐色ローム層で、硬く結まっている。層厚は15~25cmである。この層以下が武藏野ローム層(M L)に比定されると考えられる。

XII~XV層はにぶい黄褐色ローム層で、粘性が強く、硬く結まっている。層厚は5~25cmである。

XVI層はにぶい黄褐色ローム層で、黒色粒子を少量含み、硬く結まっている。層厚は10~27cmである。

XVII層は明黄褐色ローム層で、黒色粒子・赤色粒子を少量含み、硬く結まっている。層厚は15~35cmである。

XVIII層は黄褐色ローム層で、層厚は7~15cmである。

XIX層は、浅黄色の粘土層である。

なお、当遺跡の遺構のほとんどはVI層で確認され、VI層からX層にかけて掘り込まれている。

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で、古墳時代の堅穴住居跡1軒を確認した。以下、確認した遺構と出土遺物について記載する。

(1) 堅穴住居跡

第1号住居跡(第4図)

位置 調査区の南部、A 1B区。

規模と形状 一辺5.26mの方形で、主軸方向はN - 21° - Wである。壁高は28cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、中央部が踏み固められている。中央部から北部にかけて床面下まで擾乱を受けている。竈及び炉、壁溝は確認できなかった。

ピット 5か所。P 1~P 4は、深さ10~18cmで、規模と位置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ10cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

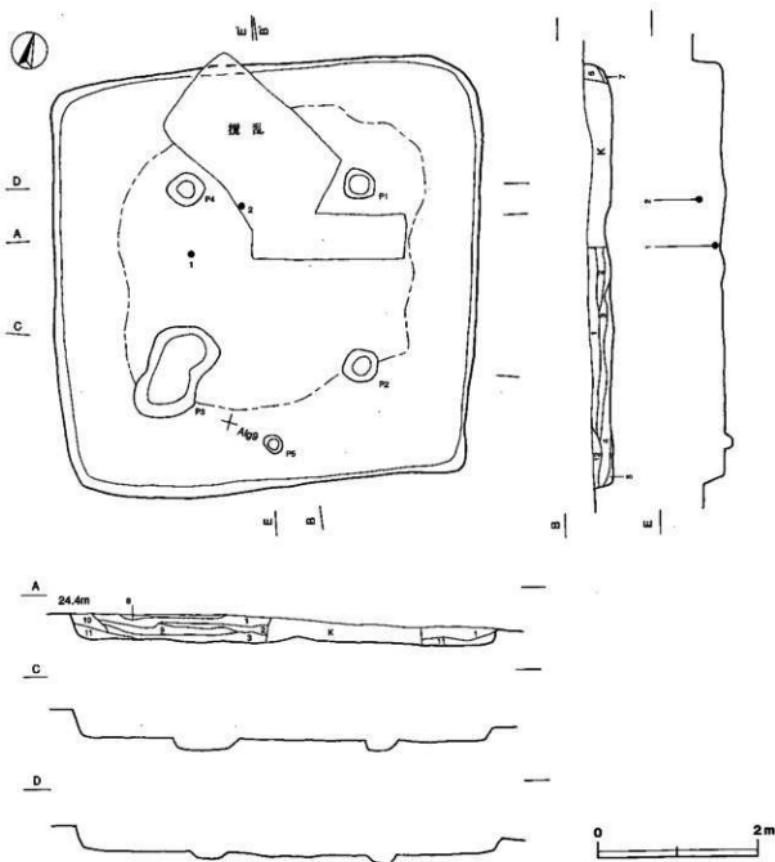
覆土 12層からなる。各層ともロームブロックや焼土を含んでいることから、人為堆積と考えられる。

土層構成

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・炭化粒子中量、ローム中ブロック・炭化物・焼土小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量、ローム大ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量、ローム中ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、焼土小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 5 紫色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、炭化粒子微量
- 6 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 7 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、炭化粒子少量、ローム中ブロック微量
- 8 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 9 黑褐色 ローム小ブロック・炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量、ローム中ブロック・焼土小ブロック微量
- 10 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子中量
- 11 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、炭化粒子微量
- 12 黒褐色 ローム小ブロック・焼土中ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子微量

遺物 土師器片171点、須恵器片11点が出土している。これらの遺物は覆土上層を中心に全体的に出土していることから、一括投棄された可能性が高い。また、出土した須恵器片は、ほとんどが擾乱部分から出土している。第5図1の土師器の壺口縁部片は、中央部の覆土下層から出土している。

所見 本跡は、当遺跡において最大の規模をもつ住居跡である。時期は、遺構の形態や覆土下層の出土土器から判断して古墳時代中期と考えられる。



第4図 第1号住居跡実測図



第5図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表（第5図）

番号	種別	機種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	手法	出土位置	備考
1	土師器	壺	[19.0]	(3.0)	—	長石、石英、赤色粒子	普通	橙	口縁部内・外面ヘラナデ	中央部覆土下層	5%
2	土師器	壺	—	(2.0)	—	長石、石英、雲母	普通	灰青褐色	壺部外側ヘラ削り	中央部復土中層	10%

2 奈良・平安時代の構造と遺物

今回の調査で、奈良・平安時代の堅穴住居跡2軒、上坑1基を確認した。以下、確認した構造と遺物について記載する。

(1) 堅穴住居跡

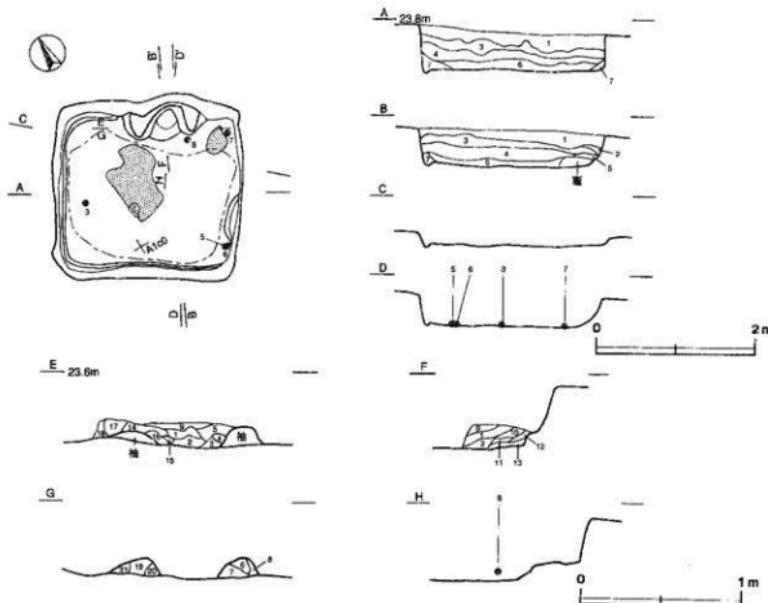
第2号住居跡（第6図）

位置 調査区域の北部、Alb0区。

規模と形状 長軸2.28m、短軸2.21mの方形で、主軸方向はN-33°-Eである。壁高は11~36cmで、外傾して立ち上がる。

床 床はほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。床面は地山面をそのまま利用している。壁溝は、南東部を除いて、壁下を巡っている。上幅11~20cm、下幅2~6cm、深さ5cmで、断面はU字形である。

ピット ピットは確認できなかった。

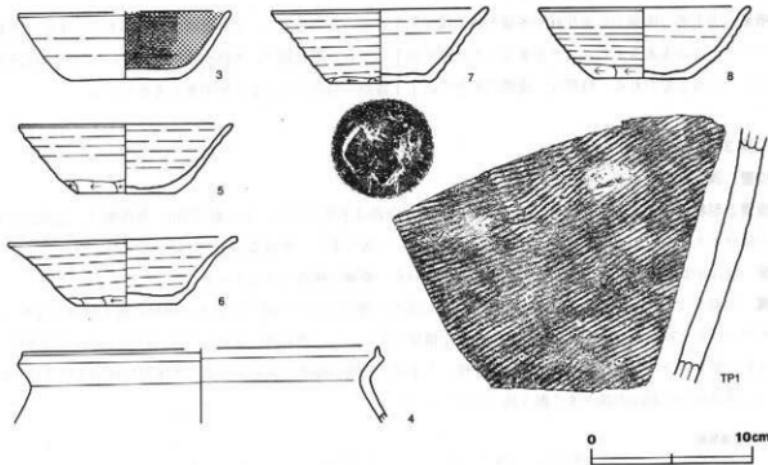


第6図 第2号住居跡実測図

竈 北壁の中央部に設けられている。天井部は崩落しており、袖部・煙道部が残存する。規模は焚口部から煙道部までの長さ50cm、袖部最大幅は90cmである。壁外への掘り込みはほとんどない。袖部は、砂粒と粘土ブロック混じりの暗褐色土で構築されている。煙道は78度の傾きで立ち上がる。火床部は長径40cm、短径30cmの不整形で、確認面から60cmの深さに掘り込んでいる。土層断面中第1層は、天井部の崩落土と考えられる。

遺土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子、焼土粒子中量、焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 ローム粒子、焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 4 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子、炭化物・炭化粒子・砂粒少量
- 5 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子、炭化物・炭化粒子・砂粒少量
- 6 暗赤褐色 ローム粒子、焼土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量、焼土中ブロック微量
- 7 表色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、炭化物・炭化粒子微量
- 8 暗褐色 ローム小ブロック・炭化物・砂粒少量
- 9 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子、炭化粒子少量
- 10 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子、砂粒少量
- 11 暗赤褐色 ローム粒子、焼土粒子少量、焼土小ブロック微量
- 12 暗赤褐色 ローム小ブロック・ローム粒子、焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子微量
- 13 灰褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 14 灰褐色 ローム粒子、砂粒少量
- 15 暗赤褐色 ローム粒子、焼土小ブロック・焼土粒子・砂粒少量
- 16 灰褐色 ローム粒子・砂粒少量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子微量



第7図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表（第7図）

番号	種別	機種	口径	深	底	性	胎上	焼成	色調	手法	出土位置	備考
3	土師器	壺	[13.0]	4.2	[6.7]	長石・石英・雲母・赤色粒子	普通	にひき緋	内面黒色処理	西側床面	50%	PL5
4	土師器	壺	[22.0]	(4.7)	—	長石・石英・雲母	普通	燈	口縁部内・外面模ナデ	覆土中層	5%	
5	須恵器	壺	13.2	4.3	6.1	長石・雲母	普通	灰黄	底部1方向へのハラ削り	南東コーナー部床面	100%	PL5
6	須恵器	壺	14.3	4.2	6.2	長石・石英・雲母	普通	にひき緋	リクロ引緋い、籠目1方向へのハラ削り	南東コーナー部床面	100%	PL5
7	須恵器	壺	13.4	4.5	6.2	雲母	普通	にひき緋	籠目1方向へのハラ削り、不定窓ハサナチ	北東コーナー部床面	80%	PL5
8	須恵器	壺	13.1	4.5	5.9	長石・石英・雲母・赤色粒子	普通	にひき緋	体部内・外面クロナデ	東東袖形柱近隣下層	80%二次焼成PL5	
TP1	須恵器	甕	—	(15.6)	—	雲母・黒色粒子	普通	にひき緋	体部外側斜位の平行叩き	中央部床面		

- 17 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック微量
- 18 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 19 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・燒土粒子・粘土粒子微量
- 20 暗褐色 粘土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 21 黄色 ローム粒子少量

覆土 7層からなる。土層断面図中、6層は焼土小ブロックを中量、炭化材を少量含み、本住居跡の焼失に伴う堆積土と推定される。第1層から第5層はレンズ状に堆積しており自然堆積と考えられる。本跡は、焼失後自然堆積により埋没したと推定される。

土層解説

- 1 黄色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム大ブロック・燒土粒子微量
- 2 黑褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 黑褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、ローム大ブロック・ローム中ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・燒土粒子・砂粒微量
- 6 暗褐色 烧土小ブロック中量、ローム粒子・燒土粒子・炭化材少量、ローム大ブロック微量
- 7 暗褐色 ローム粒子・燒土粒子少量、ローム小ブロック微量

遺物 土師器片92点、須恵器片7点が出土している。これらの遺物の多くは、竈内の覆土や中央部から南東部にかけての覆土中層から床面にかけて出土している。第7図5・6の須恵器は、南東コーナー部の床面から正位の状態で重なって出土している。

所見 中央部の床面から炭化材や多量の焼土塊が出土していることから、本跡は焼失住居である。また、南東コーナー部の床面直上から2点が重なった状態で出土している須恵器は、本跡が使用されていた当時の状況を示していると思われる。時期は、遺構の形態や出土土器から判断して、9世紀中葉と考えられる。

第3号住居跡（第8図）

位置 調査区の南東部、A 2gl区。

規模と形状 東部が調査区域外に延びているため、全容は不明である。南北軸2.73m、東西軸は、2.60mだけが確認でき、方形と推定される。主軸方向はN-1°-Wである。壁高は25cmで外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、竈から中央部にかけて硬化している。壁溝は確認できなかった。

竈 北壁ほぼ中央に位置している。規模は、焚口部から煙道部までの最大長74cm、両袖部最大幅94cmである。袖部は砂粒と粘土ブロック混じりの暗褐色土で構築されている。煙道部は壁外へ32cmにわたり丸みを帯びた三角形に掘り込んでいる。煙道は下半部で40度、上半部で75度の傾きで立ち上がる。火床部は径20cmのほぼ円形で、確底面から46cmの深さまで掘り込んでつくっている。

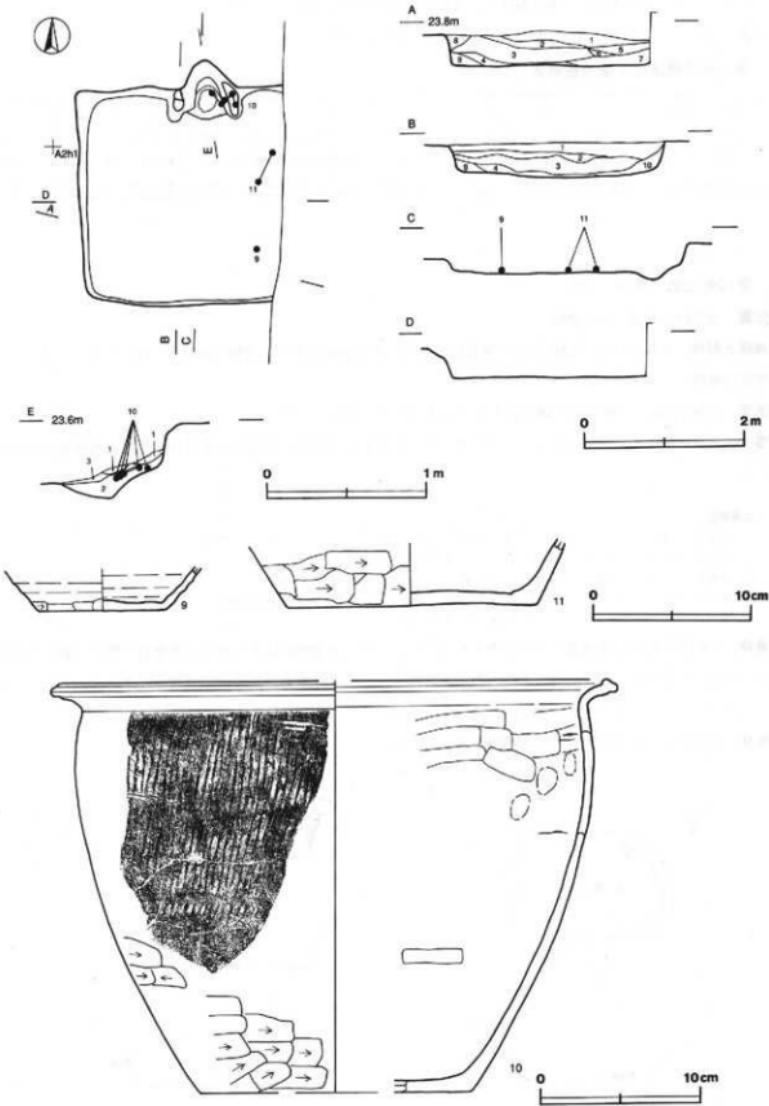
竈土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、燒土粒子・炭化粒子中量、ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・燒土粒子多量、炭化粒子中量、焼土小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子中量、ローム小ブロック少量

覆土 10層からなる。各層ともロームブロックを含み、不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、燒土小ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子少量、ローム中ブロック微量
- 3 黑褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 4 黑褐色 ローム粒子少量、ローム中ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化物微量
- 7 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子微量
- 8 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量、燒土小ブロック・燒土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 9 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 10 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子少量



第8図 第3号住居跡・出土遺物実測図

遺物 土師器片71点、須恵器片9点が出土している。これらの遺物は、竈内と東部の覆土下層から床面にかけて出土している。第8図11の須恵器鉢は、東部中央の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から判断して8世紀後半と考えられる。

第3号住居跡出土遺物観察表（第8図）

番号	種別	機種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	手法	出土位置	備考
9	須恵器	壺	—	(2.7)	8.0	石英、雲母	普通	にい青	底部1方向のヘラ削り	南東部床面	10% PL6
10	須恵器	鉢	[34.2]	25.7	[17.0]	石英、雲母	不良	明赤褐色	体部外表面方向の叩き	竈内覆土中層	40% PL6
11	須恵器	鉢	—	(4.2)	15.9	長石、石英、雲母	普通	にい青	体部外表面下位ヘラ削り	東部中央床面	5% PL6

（2）土坑

第10号土坑（第9・10図）

位置 調査区の南部、A1g9区。

規模と形状 長軸2.03m、短軸1.35mの隅丸長方形で、深さ40cmである。長軸方向はN-60°-Wである。

壁面は外傾して立ち上がる。

底面 長軸1.72m、短軸1.1mの隅丸長方形で、ほぼ平坦である。

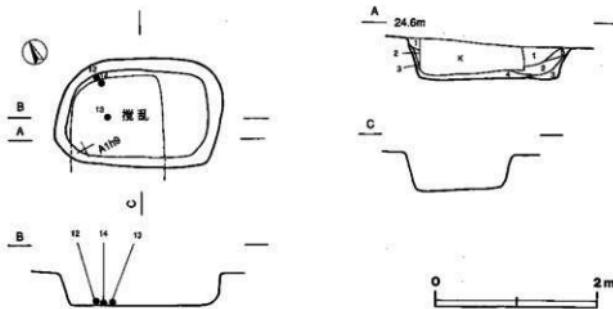
覆土 5層からなる。各層ともにロームブロックや炭化粒子を含み、不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

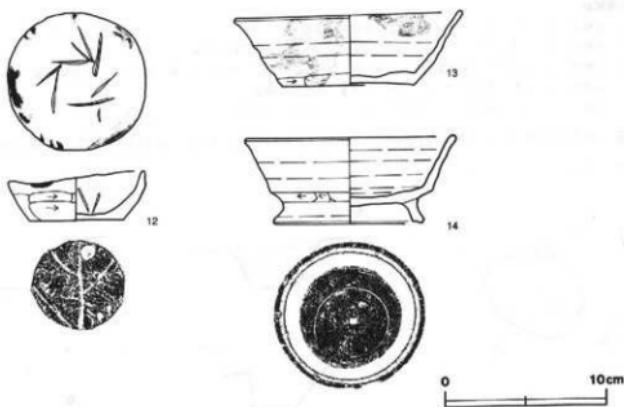
- 1 暗褐色 ローム小ブロック多量、ローム粒子中量、炭化粒子少量、ローム中ブロック・炭化物微量
- 2 黒褐色 炭化粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子少量、ローム中ブロック・炭化物微量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子少量

遺物 土師器片12点、須恵器片10点が出土している。これらの遺物のはほとんどは、南東部の覆土下層から北西部の床面にかけて出土している。第10図12の土師器壺、14の須恵器高台付壺は、北西コーナー部の床面直上から12を上にして、ほぼ正位の状態で重なって出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第9図 第10号土坑実測図



第10図 第10号土坑出土遺物実測図

第10号土坑出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	機種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	手 法	出土位置	備考
12	土器	坏	8.5	3.1	5.8	長石、石英、雲母、赤鉄鉱	普通	明赤褐	口縁部内・外表面ナメ	北西部床面直上	蓋付100% PL.5
13	須恵器	坏	14.2	4.5	8.3	長石、雲母	普通	灰 黄	底部2方向のハラ削り	西部床面	蓋付100% PL.5
14	須恵器	胎模	13.0	5.4	9.2	石英、雲母	普通	灰黄褐	造形輪ヘラ削り後、胎模剥り付け	北西部床面直上	90% PL.5

3 時期不明の遺構と遺物

今回の調査で時代が明らかでない遺構として、土坑9基、溝跡3条、不明遺構1基を確認した。以下、確認した遺構と出土した遺物について記載する。

(1) 土坑

今回の調査の結果、10基の土坑が確認された。このうち、出土遺物から奈良時代と考えられる第10号土坑は奈良・平安時代の頃で取り上げている。その他の土坑は、出土遺物が少ないため、時代・性格とも不明なものが多い。ここでは、縄文時代の陥り穴の可能性がある第1号土坑を取り上げ、それ以外は一覧表および実測図で掲載する。

第1号土坑（第11図）

位置 調査区の中央部、A 1e0区。

規模と形状 長軸1.25m、短軸0.96mの橢円形で、深さ54cmである。長径方向はN—56°—Eである。壁面は外傾して立ち上がる。

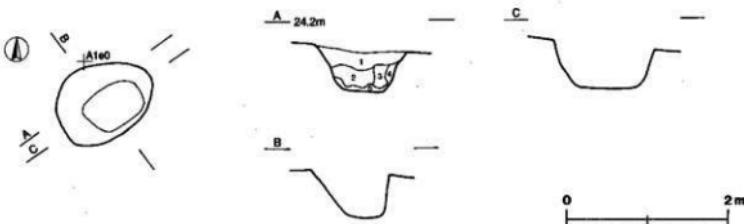
底面 長軸0.68m、短軸0.5mの隅丸長方形で、ほぼ平坦である。

覆土 5層からなる。各層ともロームブロックを含み、不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子・炭化物微量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

所見 遺構の形態から、縄文時代の陥し穴の可能性が考えられる。詳細な時期は、遺物が出土していないため不明である。



第11図 第1号土坑実測図

表2 土坑一覧表

土坑 番号	位 置	長径方 向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	出 土 遺 物	時 代	備 考
				長径(幅)×短径(幅)(m)	深さ(m)						
1	A 1 e 0	N-56° -E	楕円形	1.25 × 0.96	54	外傾	平坦	人為		不明	
2	A 1 g 9	N-86° -E	椭丸長方形	1.94 × 1.18	10	外傾・緩斜	平坦	人為		不明	
4	A 1 g 8	N-81° -W	楕円形	0.73 × 0.64	10	緩斜	平坦	自然		不明	
5	A 1 f 0	N-71° -W	楕円形	0.80 × 0.58	15	緩斜	平坦	人為		不明	
6	A 1 g 0	N-35° -W	椭丸長方形	0.44 × 0.33	17	緩斜	圓状	自然		不明	
7	A 1 g 0	N-46° -W	円形	0.82 × 0.76	14	緩斜	圓狀	人為		不明	
8	A 1 h 0	N-55° -E	円形	0.34 × 0.31	11	外傾	平坦	人為		不明	
9	A 1 h 0	N-10° -E	楕円形	0.88 × 0.43	16	外傾	平坦	人為		不明	
10	A 1 g 9	N-60° -W	椭丸長方形	2.03 × 1.35	40	外傾	平坦	人為	土師器坏、須恵器坏、高台付坏	奈良	
14	A 1 e 8	N-66° -E	楕円形	0.74 × 0.54	40	緩斜	圓狀	人為		不明	

第2号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム大ブロック・ローム中ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量

第4号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子少量、炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、炭化粒子微量

第5号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック多量、ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量

第6号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量

第7号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量

第8号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 黑褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック微量

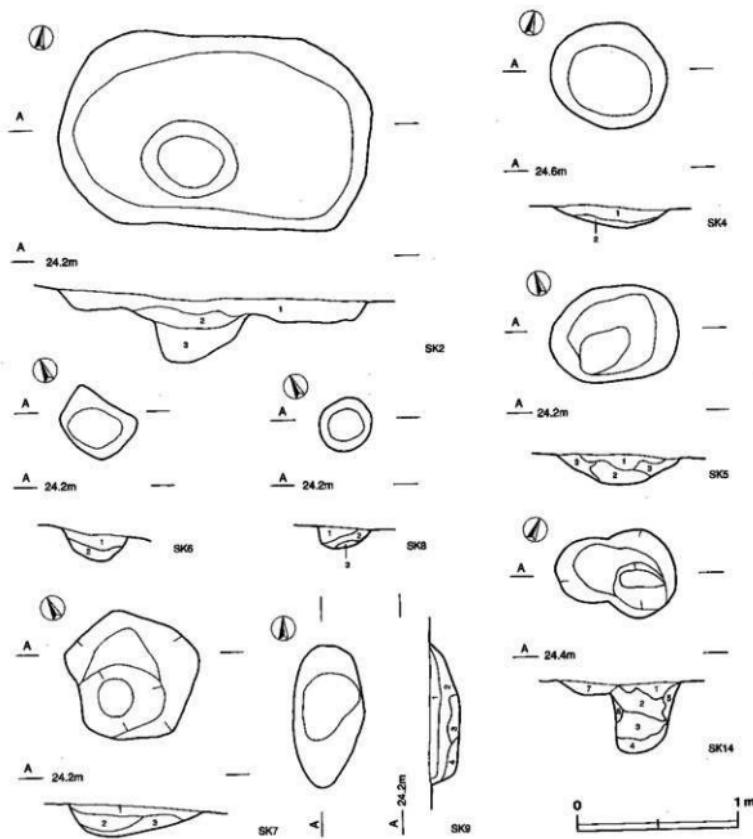
第9号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量

第14号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 2 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量、炭化物微量

- 3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、ローム小ブロック微量
 4 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
 5 喀褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子少量
 6 斑褐色 ローム粒子・炭化粒子中量
 7 喀褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量



第12図 その他の土坑実測図

(2) 溝

第1号溝 (第13図)

位置 調査区の北西部、A 1c8～A 1c9区。

規模と形状 上幅0.24～0.65m、下幅0.05～0.36m、深さ11～47cmである。北西部が調査区域外に延びており、確認できた長さは3.93mである。断面は緩やかなU字形である。

方向 A 1c9区から南西方向 (N - 120° - W) に直線的に延び、A 1c9区の西端部で北西方面 (N - 60° - W) に折れ、調査区域外に至っている。

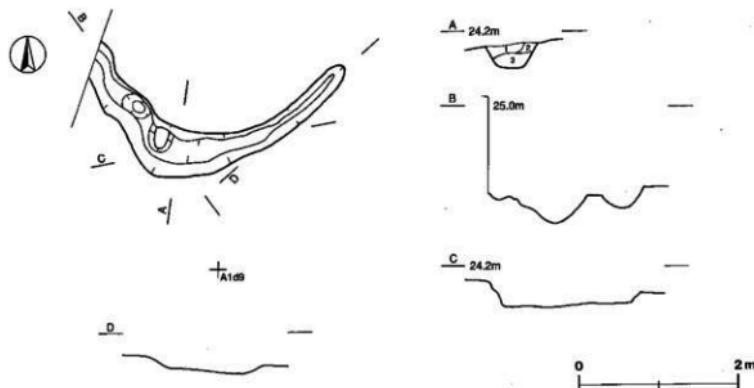
覆土 3層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子少量

遺物 土師器片3点が出土している。土師器は壺の体部細片で、いずれも覆土上層から出土している。

所見 時期は、判断できる遺物が出土していないため不明である。



第13図 第1号溝跡実測図

第2号溝（第14図）

位置 調査区の北西部、A 1c0区。

規模と形状 上幅0.23~0.25m、下幅0.08~0.13m、深さ4~9cmである。北東部が調査区域外に延びており、確認できた長さは0.81mである。断面は緩やかなU字形である。

方向 A 1c0区で北東方向（N - 27° - E）に直線的に延び、調査区域外に至っている。

遺物 不明鉄製品1点が出土している。第14図M 1の不明鉄製品は、覆土上層から出土している。

所見 時期は、鉄製品が1点出土しているものの判断できる土器が出土していないため不明である。

第2号溝跡出土遺物観察表（第14図）

番号	器種	計測値			材質	特徴	出土位置	備考	
		全長(m)	幅(cm)	厚さ(cm)					
M1	不明鉄製品	8.1	2.4	0.5	16.9	鉄	Sの字状を呈し、中央部に三角状の突起部	覆土上層	PL6

第3号溝（第14図）

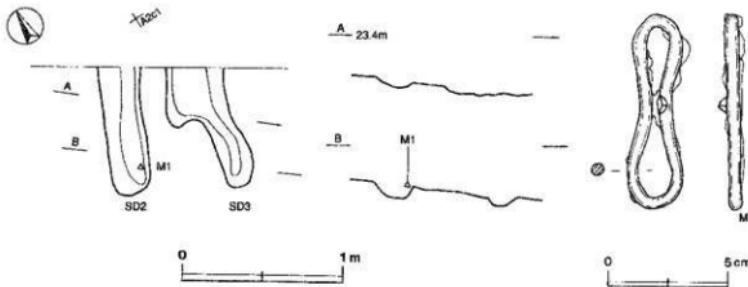
位置 調査区の北西部、A 1c0~A 2c1区。

規模と形状 上幅0.16~0.38m、下幅0.06~0.22m、深さ3~8cmである。北東部が調査区域外に延びており、確認できた長さは0.86mである。断面は緩やかなU字形である。

方向 A 2c1区から北北西方向（N - 10° - W）に直線的に延び、A 1c0区の東端部で北北東方面（N - 6° - E）に折れ、調査区域外に至っている。

遺物 遺物は出土していない。

所見 時期は、判断できる遺物が出土していないため不明である。



第14図 第2・3号溝跡・出土遺物実測図

(3) 不明遺構

第1号不明遺構(第15図)

位置 調査区の北西部、A 1b8・A 1b9～A 1c8・A 1c9区。

規模と形状 長径1.40m、短径1.20mの不定形の土坑状遺構から、それぞれ北方向と西方向に延びる溝状の掘り込みが確認できた。不整形の土坑状遺構は、深さ38～60cmである。長径方向はN-45°-Wである。壁面は外傾して立ち上がる。北方向に延びる溝状の掘り込みは、上幅0.49～0.53m、下幅0.11～0.33m、深さは12cmである。断面は緩やかなU字形を呈している。西方向に延びる溝状の掘り込みは、上幅0.28～0.39m、下幅0.12～0.25m、深さは28cmである。断面はU字形を呈している。いずれも調査区域外に延びている。

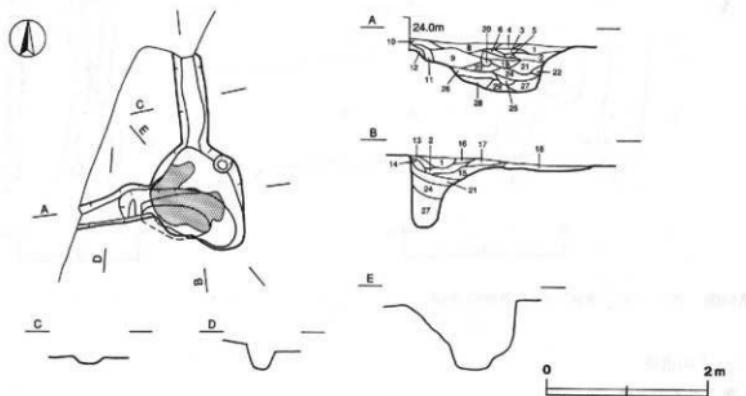
覆土 29層からなる。上層断面中、第18層は自然堆積と考えられる。それ以外の各層は炭化粒子や焼土、ロームブロックを含み、不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

土壤解説

- | | | | |
|--------|---|-----------|---|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック・炭化粒子中量、ローム粒子・燒土小ブロック・焼土粒子少量 | 16 黒褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子少量、燒土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 炭化粒子少量、ローム小ブロック・ローム粒子・燒土粒子少量、燒土小ブロック微量 | 17 黒赤褐色 | 燒土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子・燒土小ブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ローム小ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子・燒土粒子少量、燒土小ブロック微量 | 18 黑褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子少量、ローム中ブロック微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量、ローム小ブロック微量 | 19 黒赤褐色 | 燒土大ブロック・燒土中ブロック・燒土粒子多量、燒土小ブロック・ローム粒子少量 |
| 5 黒褐色 | 燒土粒子多量、燒土小ブロック・炭化粒子中量 | 20 赤褐色 | 燒土粒子多量、燒土大ブロック・燒土中ブロック・燒土小ブロック中量、ローム粒子少量 |
| 6 黒褐色 | 炭化粒子中量、ローム粒子・燒土小ブロック・燒土粒子少量、ローム小ブロック微量 | 21 赤褐色 | 燒土粒子中量、ローム粒子・燒土小ブロック少量、ローム小ブロック・燒土大ブロック・燒土中ブロック微量 |
| 7 喀赤褐色 | 羅土小ブロック・燒土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子少量 | 22 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 8 黑褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・燒土小ブロック・燒土粒子・炭化物微量 | 23 にぶい赤褐色 | ローム粒子・燒土小ブロック・燒土粒子少量、ローム小ブロック微量 |
| 9 黒褐色 | 炭化粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック・炭化物微量 | 24 黑褐色 | ローム粒子・燒土中ブロック・燒土粒子微量 |
| 10 黑褐色 | ローム小ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量、ローム小ブロック・ローム粒子多量、炭化粒子少量 | 25 黑褐色 | ローム粒子少量、燒土粒子微量 |
| 11 黑褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 26 黑褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック微量 |
| 12 黑褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 27 黑褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック微量、ローム大ブロック・ローム中ブロック微量 |
| 13 砂褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量、炭化粒子少量、燒土粒子微量 | 28 喀褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子微量 |
| 14 黑褐色 | 炭化粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・燒土粒子少量 | 29 黑褐色 | ローム粒子少量 |
| 15 黑褐色 | ローム小ブロック中量、ローム粒子・燒土小ブロック・燒土粒子・炭化粒子少量、ローム中ブロック微量 | | |

遺物 遺物は出土していない。

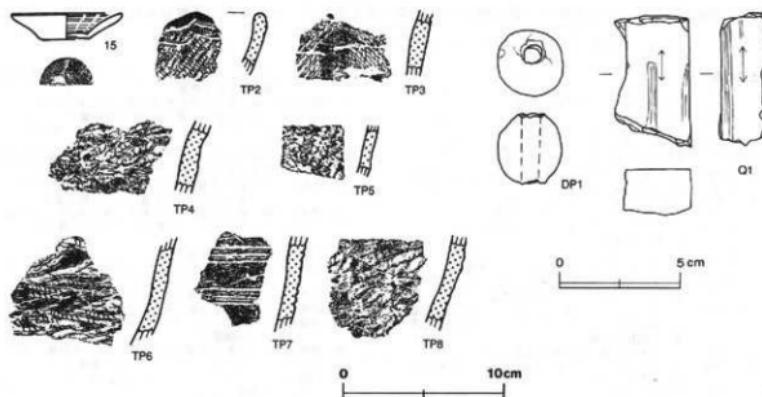
所見 時期は、判断する土器が出土していないため不明である。遺構の形状および土層から判断して、溝を掘り込んだ土坑に多量の焼土が投棄された可能性も考えられる。



第15図 第1号不明遺構実測図

4 遺構外出土遺物

今回の調査で、遺構に伴わない縄文時代から近世にかけての遺物が出土している。ここでは、これらの出土遺物のうち特徴的なものについて掲載する。



第16図 遺構外出土遺物実測図

遺構出土物観察表（第16回）

番号	種別	機種	口径	器高	底径	胎土	焼成	手法	出土位置	備考
15	土師質土器	小皿	7.0	1.6	3.1	長石、雲母	普通	底部斜軸糸切り	表土中	60% PL6

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
TP2	縄文土器	深鉢	—	(3.8)	—	L.Rの單節繩文が施文	雲母、白色粒子、繩維	普通	にぶい褐	表土中	(黒浜式) PL6
TP3	縄文土器	深鉢	—	(3.9)	—	撫糸文が施文	雲母、長石、繩維	普通	明赤褐	表土中	(黒浜式) PL6
TP4	縄文土器	深鉢	—	(4.2)	—	無筋繩文が施文	雲母、白色粒子、繩維	普通	にぶい褐	表土中	(黒浜式) PL6
TP5	縄文土器	深鉢	—	(3.0)	—	Lの無筋繩文が施文	雲母、繩維	普通	橙	表土中	(黒浜式)
TP6	縄文土器	深鉢	—	(6.1)	—	撫糸文が施文	雲母、長石、繩維	普通	にぶい橙	表土中	(黒浜式) PL6
TP7	縄文土器	深鉢	—	(5.4)	—	横位の平行沈線文が施文	雲母、長石、繩維	普通	にぶい橙	表土中	(黒浜式) PL6
TP8	縄文土器	深鉢	—	(5.7)	—	Lの無筋繩文が施文	雲母、長石、繩維	普通	にぶい橙	表土中	(黒浜式) PL6

番号	器種	計測値				特徴	胎土・色調	出土位置	備考
		径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)				
DPI	球状土錐	2.7	2.9	0.8	19.9	球体、ナデ	長石、明赤褐	表土中	PL6

番号	器種	計測値				石質	特徴	出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
Q1	砾石	(5.5)	3.1	2.0	50.8	凝灰岩	砥面2面、中央部が薄くなっている	表土中	PL6

表3 壓穴住居跡一覧表

剖面 番号	主軸方向 (接軸)	平面形 (長軸×短軸)	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁清	内 部 施 設			覆土	出 土 遺 物	時 代	備 考
							柱穴	梁口	ビット				
1 A1 f8	N-21°-W	方形	5.26×5.26	28	平坦	—	4	1	—	—	人為	土師器等・瓦坏	古墳
2 A1 b0	N-33°-E	方形	2.28×2.21	11~36	平坦	一部	—	—	—	—	自然	土師器坏・甕、須恵器坏・甕	平安
3 A2 g1	N-1°-W	方形	2.73×(2.60)	25	平坦	—	—	—	—	—	人為	土師器坏・須恵器甕・瓶	奈良

表4 溝一覧表

番号	位 置	方 向	断面形	規 模 (m)				立ち上がり面	底面	覆土	出 土 遺 物	時 代	備 考
				長さ	上 幅	下 幅	深さ(cm)						
1	A1 c8~A1 c9	N-120°-W・N-60°-W	U字形	(3.93)	0.24~0.65	0.05~0.36	11~47	外傾	U字状 平坦	自然	—	—	不明
2	A1 c0	N-27°-E	U字形	(0.81)	0.23~0.25	0.08~0.13	4~9	鐵錐	U字状	—	鐵製品	—	不明
3	A1 c0~A2 c1	N-10°-W・N-5°-E	U字形	(0.86)	0.16~0.28	0.06~0.22	3~8	鐵錐	U字状	—	—	—	不明

第4節 まとめ

今回の調査によって、当遺跡から古墳時代の竪穴住居跡1軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡2軒、土坑1基、時期及び性格不明の土坑9基、溝3条、不明遺構1基を検出した。また、出土した遺物は、縄文時代の深鉢片から中世の土師質土器と多時期にわたっている。ここでは、それぞれの時期の検出した遺構と遺物について概要を述べ、まとめたい。

1 縄文時代から弥生時代

縄文時代の遺構は確認できなかった。遺構に伴わない遺物で確認できた時期は、縄文時代前期前葉（黒浜式期）である。以上のことから前期前葉にわずかながら人々の生活の場として利用されたことがうかがえる。弥生時代の遺物としては、後期に属すると考えられる壺の細片が遺構外から数点出土している。

2 古墳時代

今回の調査では、調査区のやや南西寄りから中期の住居跡1軒（第1号住居跡）を検出した。本住居跡の窓や炉は確認できなかった。中央部から北部にかけて床面下まで搅乱を受けている。床の硬化面は搅乱部分を除く中央部で確認できた。締まりが弱いことから、本跡は短期間の使用後、廃絶された可能性が考えられる。当遺跡の周辺では、花室川沿いに多数の集落跡が確認されている。花室川南岸に位置する向原遺跡、烏山遺跡、宮前遺跡、北岸に位置する永国遺跡などはすでに調査され、古墳時代中期の遺構が検出されている。

3 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡2軒、土坑1基が検出されている。

当遺跡の周辺では、花室川沿いに多数の集落跡が確認されている。そのうちいくつかの遺跡については発掘調査が行われている。当遺跡から南西約0.9kmに位置する念代遺跡¹では、奈良・平安時代の竪穴住居跡が19軒ほど検出されている。念代遺跡の第3号住居跡からは当遺跡の第3号住居跡から出土した土器と類似する須恵器の坏が出土している。時期も同時期の8世紀後半である。

当遺跡と念代遺跡は住居跡の形態や遺物との間わりから考えると少なくとも同じ時期に集落が形成されていたと考えられる。

4 中世

今回の調査で遺構は検出されなかったが、土師質土器（小皿）が1点出土している。この時期の遺構が調査区城外に存在しているものと推定される。

今回の調査の結果、縄文時代・弥生時代は、遺物がわずかながら確認されたことから当遺跡周辺に人々が生活していた痕跡がうかがえる。その後、当遺跡周辺の台地上では古墳時代から奈良・平安時代にかけて断続的に人々が生活を営み、平安時代を最後に生活の場ではなくなっていったと考えられる。

これらのことから当遺跡は、古墳時代及び奈良・平安時代を中心とする縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることが判明した。

註)

- 1) 茨城県教育財団「主要地方道土浦竜ヶ崎線道路改良工事地内埋蔵文化財報告書 右初貝塚東遺跡 内路地台遺跡 念代遺跡 平坪遺跡」 〔茨城県教育財团文化財調査報告〕第111集 1996年3月

写 真 図 版



調查区全景



第1号住居跡完掘状況



第2号住居跡完掘状況



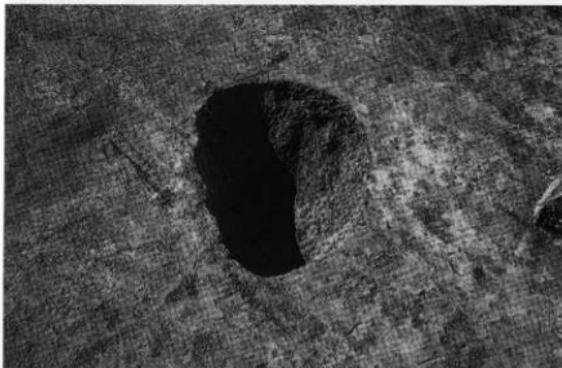
第2号住居跡遺物出土状況



第3号住居跡完掘状況



第10号土坑遺物出土状況



第1号土坑
完掘状况



第1号溝
完掘状况

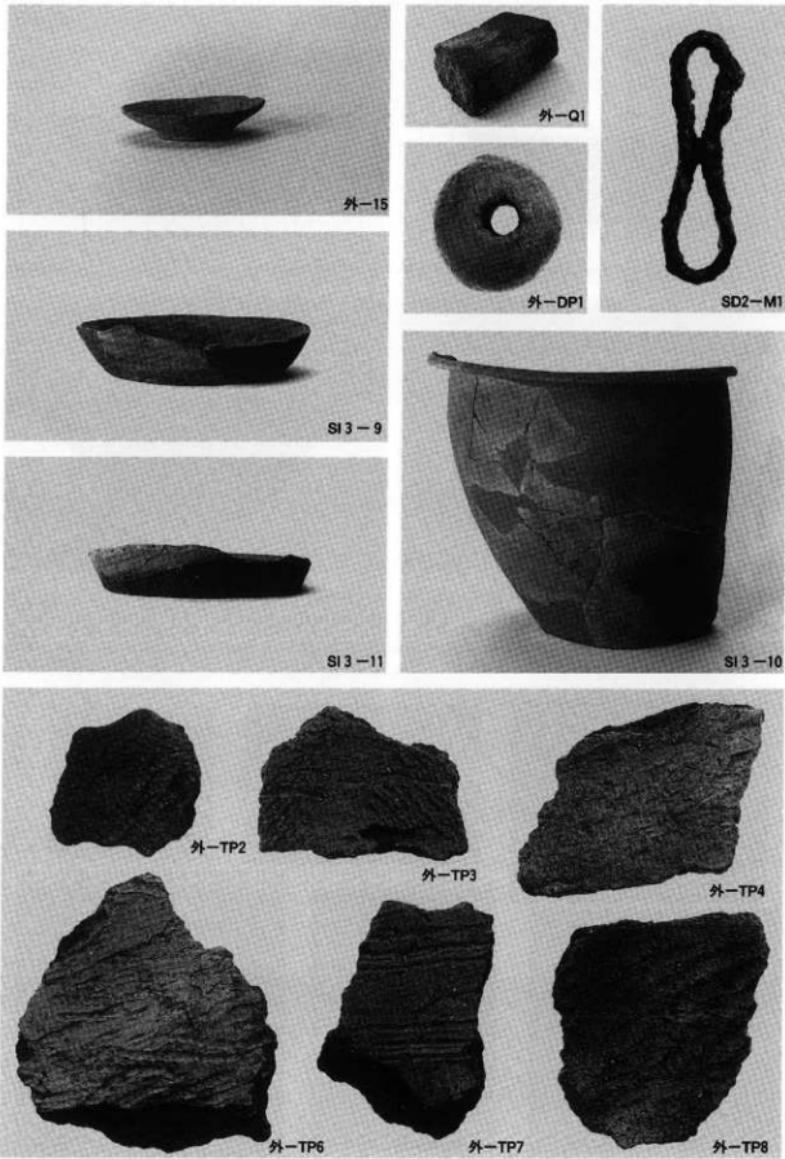


第1号不明遺構
焼土塊確認状況



第2号住居跡、第10号土坑出土遺物

P L 6



第3号住居跡、第2号溝、遺構外出土遺物

茨城県教育財團文化財調査報告第194集

谷 烟 遺 跡

平成14年(2002)3月20日 印刷

平成14年(2002)3月25日 発行

発行 財團法人 茨城県教育財團
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸市生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 株式会社 イセフ
〒305-0005 つくば市天久保2丁目11-20
TEL 0298-51-2515